

医療と身体を考える：  
凶像から読み解く西洋中世医学の文化史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久木田, 直江 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9769">http://hdl.handle.net/10297/9769</a>

# 医療と身体を考える

## — 図像から読み解く西洋中世医学の文化史 —

久木田 直江

### はじめに

ロイ・ポーターというイギリスの歴史家は、「人体という戦場で病氣と医者が繰り広げる戦いには、初めと中があるが、終わりはない」と言っています。人類の生活形態が、狩猟や採集の遊牧生活から、牧畜と農業を行う定住生活に移行したときに、感染症の環境が広がりました。畜産と農業によって飢餓から解放されますが、それと引き換えに、病氣との戦いが始まりました。その戦いに終わりは無いということです。

現代医学では、三〇億個に及ぶヒトのゲノムの解説が可能になりましたが、人類はいまだに新型インフルエンザや新たな伝染病の脅威にさらされています。二十一世紀に暮らす私たちはとても快適な生活を享受していますが、高度

成長以前、この国においても主な病氣の原因は伝染病や栄養失調でした。自然の脅威がもたらす災害も、人の健康を大きく揺るがします。そのことを私たちは、大震災を通して本当に思い知らされました。ですから、現代社会に潜むあらゆる危険を直視するときに、伝染病、飢餓、天災の危険にさらされながら生きてきた人たちを省みる機会が生まれると思います。社会構造の変化、価値観の多様化という、現代社会の背景にあるいろいろな問題の中で、近代医学の大きな柱である西洋医学の伝統について、今日は考えていきたいと思えます。

### ＋中世の身体論

これからお話しする中世の医学には、現代の医学的知見に照らすと、妄想とも思える見解や言説があるかもしれま

せん。中世に生きた人々は、当時において知り得たあらゆる知識と経験を頼りに、理論的な説明を試みましたが、近世以降、科学の時代が到来すると、古代・中世の医学を原始的、迷信的と見なす傾向が強まりました。しかし、歴史家フェルナン・ブローデルは名著『地中海』において、歴史的变化を海の底のゆっくりとした流れに例えています。そのような穏やかな変化は人々の心性の奥底にある潮流として、信仰や社会で共有される認識などに見いだされます。その意味で注目すべきことは、ローマ帝国崩壊後一千年をかけて、キリスト教的な価値観が西洋社会のあらゆる階層に浸透したということです。同時に医学や医療の分野では、ギリシャ医学を継承しました。もとよりギリシャ医学は人間を宇宙の中に位置付け、自然との調和に基づく人間観を通して、身体と魂のバランス、ハーモニーを提唱しました。この健康観がヨーロッパに伝播し、魂の健康と死後の救済を結び付けるキリスト教に吸収されていったのです。その結果、病める人の身体と魂の両方をケアする医療が行われるようになりました。

この「心身一元論」に基づく中世の身体論は、キリスト教社会に大きな分裂をもたらした宗教改革、また、十七世紀以降、哲学者デカルト等が主張した「心身二元論」や身

体を機械に見立てる「身体機械論」に取って代られます。「心身二元論」は身体と心を厳格に区別し、人間の精神活動と身体を乖離かいはりさせました。しかしながら近年、心と体の関係を見直す身体論、医療の在り方は修正を求められています。

大航海時代の波に乗って、宗教改革に揺れるヨーロッパからキリスト教文化が日本にやってきたのは、戦国時代の後半です。本日は、宗教改革以前の中世ヨーロッパという時間的・地理的空間に焦点を当て、西洋中世の医学・医療を通して当時の死生観・健康観・ジェンダー観についてお話しし、今日に通じる精神的・身体的な健康の在り方を考えたいと思います。

### キリスト教と心身の健康

#### 十 医師キリスト (Christus medicus)

キリスト教会は、アダムとエヴァが神に背き、楽園から追放されて以来、人間は原罪を背負い、病苦、貧困、死すべき運命が与えられたと説いてきました。ヘビに誘惑されたエヴァがアダムに禁断の実を食べさせて人間の墮落が始まって以来、人間はこの世で原罪を背負っているというこ

とです。

原罪はキリストの十字架上の犠牲や洗礼によって滅せられますが、普通の人間は罪を犯し、その罰として病気が与えられます。従って、身体の回復のためには悔悛かじゆんと罪の赦ゆるしが不可欠で、霊的な健康が回復すれば身体も癒されると考えられました。ここからキリストを身体の医師、薬剤師と考える伝統が生まれます。キリストはハンセン病患者を癒すなどの奇跡を行いました。特に五世紀の教父聖アウグスティヌスは、磔はりつけにされたキリストは魂の医師であり、患者の恐怖を取り除くために自ら苦い薬を飲んだと説き、キリストの受難は人間の霊的、身体的な健康を回復させる最良の薬となりました。

フランスのブルゴーニュ地方に、ポーヌという町があり



図1 キリスト像／15世紀中頃、ポーヌ施療院

ます。ポーヌはワインの名産地ですが、そこにある施療院に、イバラの冠をかぶり、苦しげにうつむくキリスト像が安置されています(図1)。また、体中から血を流すキリストの悲痛な姿が描かれた「イーゼンハイム祭壇画」(マティアス・グリューネヴァルト作)の前には、腐ったライ麦で作ったパンを食べて発症する壊疽えそに苦しむ人々が集まって、祈りを捧げました。また、十三世紀に制作された外科学の写本の挿絵の最上段には、キリストの受難の様子、二段目と三段目には、傷の治療法が描かれています。これは医師キリストを戴く教会が病の治療を上から見守り、監督していたことを物語っています。このように、中世の教会は医療活動のあらゆる場面を支配・管理していたわけです。

#### ◆ 第四回ラテラノ公会議 ― 告解こげと悔悛の義務

こうした医療現場における教会の支配力をさらに強化する教令が、一二一五年の第四回ラテラノ公会議で出されました。これは世界史の中でも非常に重要な教会会議です。発布された教令では、病者は医師が治療を施す前に、司祭に必ず告解するよう義務付けられました。告解は一種の心理療法でもあります。聴罪司祭ちよぼうさいは魂の医者として、罪の汚れを取り除く手助けをします。これは治療中に突然訪れる

死への備えともなり、告解をせずに死を迎え、地獄に落ちる恐怖から人々を解放します。つまり、告解というのは教会による霊的な衛生管理と重なっていたのです。

『カトリック・ド・クレージュの時禱書』（十五世紀中頃）の挿絵に描かれている臨終の場面では、病人の目の前に、キリストを象徴する一本のロウソクが差し出され、手前では司祭と修道女が祈っています。テーブルの上には、終油しゅうあぶの秘跡ひせきといって、人が亡くなる前に油を塗布するための聖具が置かれ、後方に看護する女性が描かれています。その後ろにいる、フラスコを持った男性は医者です。画面後方に退いています。この医師の役割は軽視できません。フラスコの中に入っているのは尿で、尿診断を行っているのです。それが非常に重要な意味を持ちます。

医師が病人の危篤を判断すると、まず聴罪司祭が呼ばれます。よい死を迎えるために医師が果たす最も大切な役割は、死ぬ時期を知らせ、告解と終油の秘跡をとおして、最後の審判に備え、旅立たせることでした。このように、中世の医療では、よい死を迎えるための魂のケアが、社会システムとして機能していたのです。しかしながら、霊的な治療を強調した教会も、健康の回復を願って巡礼する人々を拒むことはありませんでした。

#### † 聖人崇拜と聖遺物

キリスト教の黎明期から、キリスト教徒は聖地イエルサレムやローマを巡礼しました。これに加えて、中世では全キリスト教徒が聖人、特に殉教聖人を崇拜し、聖人ゆかりの地に赴きます。有名なものは、現在でも多くの巡礼者が訪れるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ (Santiago de Compostela) という町です。ここにはキリストの弟子である聖ヤコブが生前訪れたという伝えがあり、九世紀初めにヤコブの遺体が見つかりました。聖人の遺体は（髪の毛や歯などを含め）聖遺物と信じられ、病気になる人々は聖遺物に癒しを期待し巡礼に訪れます。彼らの痛みはキリストの受難、殉教聖人の苦痛と重ねられたのです。

さらに、特定の聖人が、特定の身体の部分の加護を得意とすると信じられていました。三世紀のアレキサンドリアの聖アポロニアという聖人が、絵の中で持っているのは歯です（図2）。アポロニアは殉教の際に歯を抜かれたことから、歯病の聖人として崇められるようになったのです。この図像は十五世紀初頭のイギリスのもので、三世紀の聖アポロニアが当時殉教聖人として崇拜されていたことが分かります。また、一三四七年にペストがヨーロッパを襲い、人口の三分の一以上を奪ったと推定されています。その後



図2 聖アポロニア／内陣仕切り 15世紀初頭 パートンターフ  
(ノーフォーク) 聖ミカエル協会、著者撮影

もこの疫病は周期的に発生し、ヨーロッパ世界を震撼とさせました。人々はペストが流行ると、ペスト患者の守護聖人である聖ロクスや聖セバスチャンに加護を願いました。

### ＋巡礼と病の癒し

身体の治癒を願う巡礼が中世に増えたのは、中世医学だけでは病気が治らなかつたからだと言うのは簡単です。確かに治療費が高く、医者の数も少なく、インフラが脆弱な状況にあつて、病気がなかなか治癒しなかつたのは事実です。しかし、多くの場合、治癒には病者の主観が反映されていきました。例えば、聖遺物に近づいて聖人のオーラを感

じると、身体の中の精気が活性化したかもしれません。

また、病気の発症と治癒は季節や環境の影響も受けたと思います。中世の食生活では、冬になるとビタミン類が不足します。ビタミンAが欠乏すると鳥目に、ビタミンDではくる病になりますし、暖房や炊事で使う薪の煙が室内に立ち込める生活環境の中では、目や呼吸器の障害が起こりやすかつたのです。そうした病が、春になって巡礼に行く回復するケースがたびたびありました。特に、目の見えない人が視力を取り戻す奇跡が起きたという伝えがたくさん残っています。これは聖人のとりなしもさることながら、

巡礼中に宿泊施設で沐浴し、栄養豊かな食べ物を与えられ、粘膜の炎症がやわらいだことが功を奏したと言えます。もちろん巡礼に行くストレスから解放されるので、心身の不調を感じる人々にとって息抜きとなりました。

また、巡礼は女性の間で特に盛んでした。妊娠、出産で命を落とす危険性は非常に高く、女性は妊娠のたびに恐怖を味わいます。イギリス、ノーフォーク地方のウォルシingham (Walsingham) には「聖母のお乳」という聖遺物が奉られ、女性の巡礼地として知られていました。多くの女性たちは、ウォルシinghamの手前のホートン村 (Houghton) に立ち寄り、教会で祈りを捧げました。教会の内陣仕切り

に描かれているのは聖母子と聖母の親戚の女性と子どもたちです(図3)。全く修復されずに小さな村の教会に放置されていますが、母子の画像のみが並んでいて圧巻です。



図3 聖母子とクレオパと子どもたち／内陣仕切り 15世紀 ホートン(ノフォーク) 聖ジャイルズ教会、著者撮影

## 世俗の医学

### 十古代ギリシャと旧約聖書の伝統

ここまででは、キリスト教に重きを置いてお話ししてきましたが、次に世俗の医学、ギリシャ・イスラムの医学につ

いてお話しします。中世の医療シーンには、世俗の医学とキリスト教とのせめぎあいや融合が見られます。『シラ書(集会の書)』には、「医術は神から与えられた。医者を創造し、全地の人々に健康を与える神をたたえよう」と書かれています。ここには、旧約聖書の時代から、医者は神から与えられた尊い役割を担っていたことが示されています。医術が魔術に悪用されないのであれば、魂に害を及ぼすことがないと考えられたのです。

そして、教会に次いで、古代のギリシャ医学が、中世医学に大きな影響を与えます。ギリシャの医学者ヒポクラテス、自分の著した医学書を手にする姿が描かれた中世の図があります。ヒポクラテスの医学は紀元前四〇〇年頃、ギリシャのコス島を中心に栄えました。ヒポクラテス派の医学書には、医学論文の他に、医の倫理の基礎となる「ヒポクラテスの誓い」が含まれていて、現代の生命倫理学の教科書で必ず取り上げられます。大事なことは、ヒポクラテスの医学は、病気を各臓器の不調ではなく、全身あるいは全人格の病と捉え、ホリスティック(holistic)な医学を唱えたことです。その医療の根幹には体液バランスを中心とした、「体液病理学」がありました。ヒポクラテスを引き継いでこれを発展させたのがローマのガレノスです。ガレ

ノスはベルガモンの裕福な家に生まれて医学を学び、ローマ皇帝の侍医となりました。

#### ✦ギリシャ・イスラム医学の継承

このようなギリシャ・ローマ医学は、ローマ帝国の崩壊とともに衰退の一途をたどります。その医学や教育が継承されたのは、ビザンティン帝国とイスラム圏です。古代の重要な書物が収集されて科学が発展したのは、バグダッドを中心とするアラビア世界でした。特に八世紀以降の発展は目覚ましく、イスラム圏の有名な医者、アル・ラージー（ラーゼス）、イブン・シーナ（アヴィセンナ）、イブン・シヌッド（アヴェロス）等が活躍しました。彼らはギリシャ語の医学書を翻訳し、イスラム圏の知的体系と融合させたのです。特にアヴィセンナは薬学で大きな貢献をします。例えば、金粉や銀粉で薬を覆ったり、砂糖を混ぜ、アルコールを使用して薬を作る方法は、イスラム圏から入ってきた。

ゲルマン諸民族の移動とローマ帝国の崩壊という混乱期を経て、西ヨーロッパは、ようやく十一世紀ころ、十字軍による遠征や交易の復興を通して、イスラム圏からギリシャ医学を再び学ぶようになります。そして、アラビア語の医

学書がラテン語に翻訳され、医学の教科書になるのです。ここで注目したいのは、イタリアのサレルノという町です。サレルノにはヨーロッパで一番古い医学校がありました。このあたりは風光明媚なところで、有名なアマルフイはサレルノの対岸にあります。イスラム圏から入ってきた書物に大きな刺激を受けて、このころ揺籃期にあつたパドヴァ、ボローニャ、南仏のモンペリエで医学教育が盛んになります。当時の医学部の授業風景の絵を見ると、先生が薬学を講義し、学生はアヴィセンナの翻訳書を広げ、その傍らで助手が乳鉢と乳棒で薬草を搗りながら、薬を作っています。

モンペリエ大学で講義する医師ベルナル・ド・ゴードン (Bernard de Gordon) が描かれた絵もあります。ベルナルはとても立派なでたちです。彼の右にいる三名はアヴィセンナ、ヒポクラテス、ガレノスです。ベルナルが学生の前で講義するときに、この三名の霊を呼び起こし、自分の講義が彼らの力によって立派なものとなるようお願いしているようです。古代ギリシャ、イスラムの医学者たちが、いかに権威ある人々であつたか分かります。しかも、この三名が異教徒であることは、全く問題視されていないのです。ギリシャ、ローマの異教徒も、アヴィセンナのようなイスラム教徒も、医学の専門知識において、キリスト教の神の



僕しもべである」と理解されたからです。

### 十 古代ギリシャの体液説

このような形でギリシャ医学が導入されたわけですが、ここからは具体的に、古代ギリシャ医学の理論についてご紹介します。古代ギリシャでは、人体の働きを大宇宙の中で説明する理論体系が成立し、宇宙を「マクロコスモス」、人間の身体を「ミクロコスモス」と捉える考え方が広まりました。この理論では、人間も宇宙を構成する空気、水、土、火の四元素から成っていて、この四元素はさらに人間の体液、性質、性質を決めるとされました。古代ギリシャのコスモロジーはこのまま西洋中世に継承されました。

ヨーロッパではほとんどの人が知っている名前ですが、ドイツの女性神秘家であるビンゲンのヒルデガルトは、宇宙の中の人間というイメージの幻視を得ます(図4)。これは、円をなす宇宙「マクロコスモス」の中心に、両手を広げた人間「ミクロコスモス」が立っている図像です。大宇宙の中に小宇宙である人間が位置付けられています。そして、ここから宇宙と個々人をつなげる宇宙観、人間観が生まれるのです。

空気、水、土、火の四元素と体液を連動させたのもギリ



図4 宇宙のなかの人間／ビンゲンのヒルデガルト「神の業の書」ルッカ、州立図書館MS1942.f.9r

シャの医学です。人間の身体は血液、黄胆汁、粘液、黒胆汁の四体液で構成され、血液は空気、黄胆汁は火、粘液は水、黒胆汁は土に支配され、四大元素に対応して熱気、冷気、乾燥、湿気が起こり、そこから四つの体質(多血質、胆汁質、粘液質、黒胆汁質)が決まると考えられました。多血質は陽気な人、粘液質は女性にしつこく迫るような人、胆汁質は怒りっぽい人、黒胆汁質はうつ状態で引込んでいる人、というのが典型的な分類です。

四大元素は体液や気質のみならず、年齢や季節にも呼応しています。例えば生まれたばかりの赤ちゃんは水分をた

くさん含んでいます。年を取るとだんだん乾燥して、水分が減ってしわが増えます。これは自然の理ことわりであると考えられました。このように、中世の知識人は人間の体液バランスを宇宙全体の中に位置付けて、非常に柔軟な姿勢で理解したわけです。

キリスト教会も古代ギリシャ医学を巧みに取り入れていきます。アダムとエヴァは楽園で完全な体液バランスであったけれど、楽園を追放されたとき、体液バランスが崩れたことを表現した絵があります。薬箱が整然と並ぶ薬局のカウンターにキリストが立ち、体液バランスが崩れ病気になるアダムとエヴァがそこを訪れるのです。

体液説に関連して、もう一つ大事なことがあります。古代の医学者は、人間は外部環境へと広がった開放系であると考え、人間が生きていく上で避けられない要素を、大気、飲食、運動、睡眠と覚醒、排泄と停留、情念に分類し、それを「六つの非・自然」としました。そして、具体的に、きれいな空気を吸う、食べ物と飲み物に配慮する、散歩などの運動と安静の時間を取る、過度の睡眠や不眠を避けて、瀉血しゃくちゅうや排泄によって過剰な体液を除去する、そして喜怒哀楽、不安、心配などをコントロールして人格を磨くことを勧めました。ギリシャの体液病理学が節制と自己管理の道

徳観と結び付いたことはとても重要です。彼らの考え方は教会の教えと一致しました。教会は、怠惰、大食などを大きな罪としたので、節制の教えとギリシャのバランスの医学が一致したのです。従って、この体液生理学は非常に権威ある治療方針となって、近世に至ります。

体液説と解剖学との関係についても少し説明します。解剖は古代ギリシャで一時期行われましたが、その後、ほとんど再開されることはありませんでした。中世では特に、人体の解剖は制限されていました。キリスト教徒にとって身体は神の似姿であり、人間の魂が宿るところです。よって身体を切り開くのは不信心な行いとされたのです。しかし、十四世紀になると解剖学が外科学の授業として行われるようになりました。十六世紀のパドヴァ大学の解剖学教室を見ると、中央の台に身体を乗せて解剖を行い、学生たちはそれを立ち見していたことがわかります。

では、人間の体の仕組みをどのように考えたのかということですが、それも体液生理学を軸に考えたのです。体液の生成については、口から摂取した食べ物が一度消化され、それが肝臓に行って第二の消化が行われると考えました。ほとんどは血液になりますが、消化がうまくいかなければ上に泡が発生し、下に沈殿物が残ります。泡は黄胆汁、沈

殿物は黒胆汁となります。中世の医学には血液の循環という概念はありませんでした。血液は身体の隅々まで届けられ、消費され、老廃物は汗や息となって排出されるのです。血管は小川や灌漑用水のように張り巡らされていると考えられました。イギリスの医師ウィリアム・ハーヴェイが血液循環説を実験によって発見するまで、この考えは続きました。

#### ＋医学と占星術

ミクロコスモス、マクロコスモスについて説明したように、天界と人間の相関関係を背景に、占星術と医学が結び付けられました。これはヒポクラテスの時代までさかのぼります。

イスラム圏から天文学や占星術の情報が入ってくると、アラビア語の書物がラテン語に翻訳されます。それが大学のカリキュラムに入り、医者にはホロスコープを使うようになります。これは先端的な占星医学となりました。キリスト教会は占星術に眉をひそめたわけではありません。実は神学者は、神は最高天から天界の動きと人間の営みを見ていると考えました。キリスト降誕に際し、東方の三博士が礼拝にやってきました。彼らは占星術に通じていました。東

方で観察した星に引き寄せられてベツレヘムに向かい、神の子の誕生を証す人となったのです。占星術が内包する異教的、呪術的なものは警戒されますが、占星術師が全能の神の力について疑いを持たなければ、是認されました。占星術は盛んに行われ、ホロスコープを見ている占星術師の図もあります。

占星術では特定の惑星が人体の特定の部分の機能を支配すると考えられました。黄道十二宮の図を見ると、おひつじ宮は頭、おうし宮は首と喉、ふたご宮は肩・腕・手を支配しています。外科医が瀉血を行うとき、または大きな手術をするときは、どの宮の影響下にあるか考慮し、時期を選びました。オクスフォードに残る写本の挿絵にもありますが、黄道十二宮と人体との関係を示した図がたくさん作られました。

しかしながら、占星術をもってしても避けられないのは、厳然たる死の訪れです。死は中世の世界に偏在し、人間の命を突然奪い取りました。擬人化された死のアレゴリーが医師を訪れる図がありますが、その訪問に際し、医師はあまりにも無力です。抗生物質も点滴もない中世では、ひとたび病気になるれば、効果的な治療方法を見つけないことではできませんでした。ペストが全ヨーロッパに広がったと

きも、多くの医者は途方に暮れました。一九八〇年代から一九九〇年代にエイズが急速に広がり世界が震撼しましたが、エイズと異なり、ペストの原因や感染ルートは中世を通して解明されることはありませんでした。

#### ＋健康規則——食餌療法

そうになると、病氣予防の現実的な方法は自己管理しかありません。魂の健康と並んで奨励されたのが、体液病理学に基づく健康規則でした。これは「六つの非・自然」を重視した健康指南です。その中で特に重要だったのは、食餌療法です。どの食べ物がどのような性質を持っているかが書かれた『健康全書』という本がアラビアから伝わり、普及しました。それによると、カモミールはとても穏やかなハーブです。レタスはほてった肌を冷やし、痛みを鎮めるので、夏に食べると効果があります。また肉類では、鶏肉が健康増進に役立つと考えられました。食物重視の社会ですから、健康に関心のある人は医学書も読みます。医者は実際に料理もしました。少なくとも十五世紀まで、医者は調理に関わり、現代の管理栄養士のような役割を担っていたのです。

英詩の父ジェフリー・チョーサーも『カンタベリー物語』

に医師を登場させています。この医師も体液病理学を熟知していて、栄養に富んだ食べ物、消化のよい食べ物を摂るように言っています。中世を通して身体によい食べ物とされたのが、鳥、アーモンドなどです。病気の女性に大麦入りのチキンスープを供す絵も描かれています。

#### ＋環境——臭気と芳香

食べ物の次に重要なのが環境です。古代以来、大宇宙、小宇宙の関係で人間と環境とのつながりを考えたのです。ヒポクラテスも著書においてそれを強調しています。環境問題の中でも、中世の人々が注視したのは臭気と芳香です。悪臭は病気を引き起こす直接的な原因とされています。ですから、腐敗物から出る臭気、沼から出る悪臭、火山性のガスを極力避け、悪臭を発生させないように工夫しました。施療院の天井は非常に高く設計されています。中世医学では、においては実体があり、鼻から吸い込んだ臭気は心臓や脳に至って悪さをするので、悪臭を含んだ空気によって身体全体が不調を来すと考えたのです。

その一方で、良い香りは健康維持に貢献すると考えられました。今はやりのアロマセラピーもこの時代からあります。香りは病気に対する抵抗力を高めるので、カモミール、

ローズマリー、ラベンダーなどを天井からつるしました。壁に囲まれた庭も効果的で、バラ園などは健康増進に役立つと考えられました。香りは霊的安寧あんねいのメタファーにもなります。四方を壁で囲まれた芳しい庭園は、病氣と死に脅かされることのない楽園を想起させるということで、「閉ざされた庭」の図像が人気を得ました。

聖母マリアが幼子キリストを抱いている周りに、マリアを象徴するバラ、ユリ、アイリスなどの花々が咲いている図があります。これらの花は薬草としての効果もありました。もとより修道院の庭は薬草園から始まり、修道士が黙想する空間でした。魂と身体に安らぎを与える庭園に身を置いて罪について思い巡らすと、清らかな気持ちを訪れ健康が回復します。それを象徴するように、『ヨハネによる福音書』では、復活したキリストが庭師の姿でマグダラのマリアの前に現れます。ベルギーのブルージュという町の図書館に残る中世の写本では、庭師キリストが病苦のない庭園の主として描かれています。キリストは心身の救済を約束すると考えられました。

このようななおの言説によって、社会的な影響も出てきます。悪臭の排除が推進されると、ハンセン病患者など、においを出す可能性のある人たちがターゲットになりまし

た。彼らは、病が重くなると身体から臭気を発したので、都市から排除され、城壁のそばに建てられたハンセン病施設に隔離されました。しかし、中世の都市が慈善活動を怠っていたわけではありません。ハンセン病施設では、病者を食べさせ、手厚く看護しました。ハンセン病を病原と見なす一方で、彼らを神の祝福を受けた人とする考え方もありました。この世で病苦を背負ったハンセン病患者は、キリストと同じような存在であると考えたのです。このような思想はキリスト教のパラドックスであり、中世社会に通底する聖と俗の両義性を露呈していると考えられます。

さらに、なおの問題、疾病の言説をもう少し広げると、その影響はヨーロッパで非常に根深い反ユダヤ思想にも及び、ユダヤ人をはじめとする異教徒、異端者は臭気を放つという風説が流れました。汚いと考えられたユダヤ人は病原として扱われ、ハンセン病患者と同一視されます。このような社会にあつて、都市の衛生状態を維持するのは、市当局の重要な課題になりました。行政による公衆衛生の改善は、ヒポクラテスの唱えた環境と健康の思想に、キリスト教徒の責務である慈善活動が融合して実現したと言えます。快適で清潔な空間をつくることは敬虔けいけんな行いであり、市当局や都市部の富裕層は生活環境の改善に向けて、努力

を重ねました。

## 医療に従事した人々

中世ヨーロッパでは、さまざまな人が医療に関わっていました。大学を出た医学博士（内科医）、理髪外科医（理髪師と外科医を兼ねる）、軍医、無資格の経験医、助産婦、看護婦、民間療法を行うワイズウーマン、薬剤師など、男女ともに医療インフラを支えました。

### 十内科医

まず、内科医の教育について説明します。中世の大学には、神学、法学、医学の三つの専門課程がありました。どの専門課程に進むにも、七つの自由文芸という教養科目を勉強します。文法、修辞学、論理学の三学科、算術、幾何学、天文学、音楽の四学科で構成される自由文芸はとても重要視されていました。

例えば、天文学を勉強するのは、脈拍が星の運行に支配されると考えられたからです。文法や修辞学は、内科医が患者を診療するときに役立ちました。内科の系統立った診断法は現代のように確立していませんから、弁舌の巧みさ、

臨床マナーが大事だったのです。特に治療が困難な患者を診るときには、修辞（レトリック）が何よりの医術になりました。

大学教育を受け、立派な診療着を着た内科医が尿の入ったフラスコを手にしている図があります。尿診断は学識の見せ場で、フラスコはそのシンボルです。内科医は尿の濃度、沈殿物の状態を観察し、体液の特徴を精査します。さまざまな尿の入ったフラスコが木に描かれた「尿の木」と呼ばれる図もあり、ラテン語でそれぞれ尿の状態が説明されています。繰り返しですが、内科医の最も重要な役割は、死を迎えるための手助けをすることでした。ですから、尿の状態を調べ、星の運行を観察し、死の準備を整えさせます。生から死への橋渡しのプロセスで、魂に大きな安心感をもたらすことが、医師の大事な仕事だったのです。

中世の内科医はしばしばインテリの聖職者でもあり、魂の医者としての役割も担いました。彼らは体を調べるだけではなく、患者の告解を聴いて、贖罪と救済の仲介者になったのです。内科医の権威が増すと、王侯貴族の私生活にとどまらず、国政にも関与します。患者と医者の間には共生関係があり、その親密な絆ゆえに患者に対する影響力が生まれます。そのようなわけで、国王が慢性の病を抱えた



とになります。葉が運ばれてくる環境をつくったのは十字軍です。聖地イェルサレムをめぐる戦いの合間を縫って、地中海の東と西で文化交流が深まりました。いわば、十字軍の副産物が薬文化の発展ということになります。

## 女性の身体

### 十古代医学の生殖観

次に、女性の身体、妊娠、出産という少し大きなテーマに移りたいと思います。近年、新聞などのメディアを通して知らされるのは、著しい進歩を遂げている生殖医療の分野です。いまや社会現象となった不妊治療などが物語るのは、子孫の繁栄が個人々々、社会の大きな関心事であるということことです。翻<sup>ひる</sup>つて、幼少期を生き延びるのがとても困難だった中世の現実を察すれば、子孫存続は人々の切実な願いであつたと思います。そこで、当時の人々が生殖・出産をどのように考えていたのか見ていきますが、その前に、私たちが驚嘆させる古代ギリシャの身体観について説明します。

古代ギリシャでは、男女の生物学的差異は、四大元素（空気・水・土・火）説に基づいて解釈され、男性は崇高な元

素である火と空気に支配され、温・乾という優れた性質を有するが、女性は下位に属する水と土に支配され、冷・湿という劣った性質を有すると考えられました。四大元素は体液・体質に呼応し、男性は快活で陽気な多血質、かんしゃく持ちの胆汁質が多いとされます。他方、女性は怠惰でしつこい粘液質、憂うつ症の黒胆汁質が多いとされます。

アリストテレスは、物質世界を構成する「形相と質料」という理論を説き、これを男女の違いについても使っています。「男性は生命に靈魂を与える種である形相を提供するが、女性は胎児をつくるための混沌とした原材料の質料しか与えない」。また、「女性は男性の種を育むための器にすぎない」と言つたのです。その上、彼は「発生過程で完全に成長すると男子になり、不完全なものは女子になる」と主張し、女子は出来損ないの男性であると定義しました。

体質の違いは、精神活動にも影響を与えます。女性は冷たい体質ゆえに認識能力が弱く、感覚的で、精神的に劣るが、男性は正義感と徳において優るとされました。アリストテレスを学んだスコラ学者の間でもこのような考え方が浸透し、西洋では女性蔑視の文化が長い間根付いていました。



## キリスト教会と女性蔑視

旧約聖書の『創世記』には、「神は自分にかたどって、男と女を同時につくった」、「土からアダムをつくり、アダムの肋骨からエヴァをつくり上げ、アダムを助ける者とした」という二つの話がありますが、後者の方がキリスト教徒の想像力に訴えました。同時につくったというところは忘れ去られ、神学者の間では、「女性は男性を補佐するために創造され、従属する存在である」という考え方が浸透しました。アダムとエヴァの楽園追放の神話も、女性に非があるわけではなく、神から与えられた自由意志を持った人間が、その意志をもって神に背いたことが問題なのですが、ヘビの誘惑に屈した女性がアダムを誘惑したというレトリックが定着します。しかし、その中で唯一崇められたのが聖母マリアで、マリア崇敬は中世末に非常に盛んになります。

## 妊娠と出産

このような認識の中で、女性たちはどのように妊娠を経験し、出産し、子育てに従事したのか考えます。中世末の理想的な子育ては、イエスを育むマリアとヨゼフの生活に見ることができません。マリアの伝説上の両親であるヨアキムとアンナの子育ての様子を描いた中世の図像があります。

両親の間に幼子マリアがいて、ベビーウオーカー（歩行器）を使っている様子が伺えます。ヨアキムとアンナともに育児に余念のない姿が描かれ、中世の人々が子どもを大切に育てていたことが分かります。

子どもの出産は一大イベントであり、中世末の母性のモデルが幼子キリストを抱くマリアに求められました。そして、マリアのライフサイクルに、女性たちは自分を重ねたことと思います。

アルブレヒト・デューラーは、聖アンナの出産、即ち聖母マリアの誕生の場面を版画に描いています。中世末からルネサンスにかけて、このような場面は数多く描かれ、そこから出産に関わる女性たちの姿を見ることができません。出産には助産婦をはじめ、たくさんの女性が立ち会い、介助します。安産を願って支え合うのですが、どの女性も慌てたり、取り乱したりすることなく、落ち着いて行動しているように見えます。他の図像には、腕を露にして赤子を取り上げる助産婦や、産湯の支度をしたり、栄養豊かな食べ物や産婦に持つていく女性など、女性たちが動き回っている姿が描かれます。生まれた赤ちゃんを産湯につかわせ、産着でくるむのも女性の仕事です。産後の順調な肥立ちを図るために、産室にパンやチキンスープが運ばれる図もあ

ります。

イタリア・ルネサンス期に描かれた、ドメニコ・ギルラ  
ンダイオの「聖母マリアの誕生」では、マリア誕生の場面  
と富裕貴族の出産の様子が重ねられます。ここでは貴族の  
女性たちが見舞いに来ます。出産は妊婦にとって生死をか  
ける出来事で、それを支え合うのはやはり女性であり、女  
性の社会的義務となっていたと思います。特に、分娩用の  
医療器具のない中で、女性自身が出産のインフラとなって  
互いを支えたと言えます。そこで活躍するのは助産婦で、  
彼女たちは非常に多くの知識を持っていました。男性の医  
師が出てくるのは、他に手段がなくなっただけです。  
帝王切開の際は男性の外科医が呼ばれました。しかし、胎  
児を取り上げるのに成功したとしても、母体が無事である  
ことは非常にまれでした。産室の隅には、多くの場合、聴  
罪司祭が待機して、帝王切開で命を落とす母親の魂のケア  
を行って、衰弱した赤子にすみやかに洗礼を授けました。

中世末の助産婦は高い技術を誇り、社会的地位も確立し  
ていました。教会も助産婦の役割を重視し、産婦が死にか  
けていたら、司祭の代わりに助産婦に告解を聴かせました。  
取り上げた子が弱っていたら、助産婦がすぐに洗礼を授け  
ることもありました。ですから、助産婦の地位はとても高

かったのです。栄養状態が悪く、環境も不衛生だった中世  
では、妊娠中の異常、出産時の大量出血、産じよく熱など  
は日常茶飯事でした。中世の人々の心の奥に浸透していた  
出産のイメージは、決して喜びだけではありません。教会は、  
「妊娠、出産はエヴァの呪いだ」と教えました。生みの苦し  
みを原罪に結び付けたのです。多くの女性は出産によって  
命を落とし、子を失う恐怖にいつも怯えていました。その上、  
罪の意識を持たされたのですから、非常に困難だったと思  
います。このような中で、助産婦は妊婦を力付けて支えます。  
親しい友人たちも産室に集まって安産を願う祈りを唱えま  
す。祈りの唱和は呼吸を整えるので、心身の緊張を緩めます。  
陣痛を乗り切る中世のラマーズ法と呼べるかもしれません。  
このように、助産婦は生殖医療を担う、余人をもつて代え  
がたい存在でした。

#### ＋女性と医療活動

医学史研究の中で、女性の活動はほとんど省みられませ  
んでした。しかし、中世におけるヒーラー（治療者）のイメー  
ジは、圧倒的に女性のものです。二十世紀に至るまで、女  
性は大学の医学部に入ることはできませんでしたが、家庭  
では主婦が医療を担っていました。薬草を台所で煎じるこ

とに始まり、適切な食べ物を与えたり、掃除をしたり、ドライフラワーなどをつるして環境を整えました。薬草の知識を持つている人もいます。宇宙の中の人間の幻視を得たビンゲンのヒルデガルトは医者でした。看護婦が職業として確立するのはフロレンス・ナイチンゲールの登場を待たなければなりません。ハンガリーのエリザベトという貴族の女性が、ハンセン病の女性を沐浴させ、理想的な食べ物である若鶏を供して、手厚く看護している様子を描いた図があります。そこには大学出の医者も薬剤師も外科医もいません。

他に、中世の施療院で、修道女が看護婦としてかいがいしく働く姿を描いた絵もあります。病者の身体にこう葉を塗り、体に直接触れて癒す女性の姿が描かれた絵もあります。このような身体のケアは、中世のジェンダー観を反映しています。精神よりも肉体に近い存在である女性にふさわしい仕事だったのです。

## 中世の病院（施療院）

### 十聖なる空間

最後に、中世の施療院について見ていきますが、ここで

も、もう一度看護婦の役割について考えます。西洋文化の中世の病院（施療院）の歴史は古代に遡ります。ローマ帝国で実践された医療や施設は、帝国の拡大とともにヨーロッパ各地に広がりました。しかしながら、西洋中世の医療施設は巡礼者の宿泊施設として始まったものが多く、貧者のシェルターとしても機能し、慢性の病に苦しむ人々を受け入れました。中世の施療院はフランス語でオテル・デュ（Hotel-Dieu 直訳「神の家」）と呼ばれた慈善施設であり、病者は医師キリストに全幅の信頼を寄せて、修道院のような祈りの生活を送っていました。

教会は神に背いた罰として病苦と死が人間に与えられたと説きましたが、中世の施療院を包んでいたのは救いのイメージで、壁や天井にはキリストやマリアの絵が描かれました。パリ市民病院で働く修道女たちを活写した版画には、看護にいそむ修道



図5 ボーヌ施療院、外観／著者撮影

女たちの中央にキリストを抱く聖母マリアの像が、奥の祭壇にキリストの磔刑像たがけいが置かれています。マリアは罪深い人間たちをとりなす役割も担っています。病院の役割には霊的な治療がありました。が、一二一五年の第四回ラテラノ公会議で義務付けられた告解も、



図6 ポーヌ施療院、内部／著者撮影

この病院の治療計画の一部でした。医療は全て告解から始まるのです。また、ミサが特に重要な典礼でした。ブルゴーニュのポーヌ施療院は中央奥に祭壇があり、左右にベッドが並んでいます。病者は祭壇で行われるミサを見ることできました（図5、図6）。ミサでホスチアというパンがキリストの体に変化しますが（聖体の実体変化）、それを拝むと治療効果が得られるというオカルト的な思想があったのです。

#### 十字慈善事業

中世の施療院は、医療インフラであると同時に、キリスト教徒に課せられた七つの善行を体現していました。七つの善行というのは、天国に迎えられる人、地獄に落とされる人の選別基準についてのキリストの教えで、『マタイによる福音書』には、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、喉が渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてきてくれたからだ」とあります。この六つの善行に加え、イスラエル人を埋葬した情け深いトビトのように、死者の埋葬がキリスト教徒の義務となりました。死者が出ると、看護婦が死体を経帷子きようかたびらにくるんで埋葬の準備をします。ポーヌの施療院には、ロヒール・ファン・デル・ウエイデンによって描かれた祭壇画「最後の審判」がありました。大天使ミカエルが秤に魂を乗せ、天国に行く魂と地獄に落とす魂を振り分けています。

魂のケアに重きが置かれた中世の医療施設ですが、身体の癒しも計画的に行われ、特に清潔な環境をつくる努力がなされました。パリのオテル・デュを描いた絵には、セーヌ川を船で運ばれる患者と、セーヌ川で洗濯したシーツを干す修道女たちの姿が見られます。船は当時の救急車のよ

うなものです。修道女たちは洗濯に精を出し、病院内の空気を清潔に保ちました。また、看護婦は病人の最期の時間にも立ち会って、亡くなったら埋葬用の布に納めて、縫い綴じました。ゆりかごから墓場まで、人間の身体に直接触れて奉仕したのは、主に女性だったのです。残念ながら、公文書には女性の活動の記述はほとんどありません。しかし、写本の挿絵などを通して女性の献身的な姿に接することができるのです。

このように中世の施療院では、健康規則、教会典礼を通して、身体と魂のあいだに区別のないケアが行われました。七つの慈善が行われ、その返礼として病者も寄贈者の魂のために祈りました。施療院やハンセン病施設は都市の門のそばに建てられ、病者と貧者にケアを与える病院は都市のブライドを体現していました。



図7 ノリッジ 聖ジャイルズ病院、南側正面／善者撮影

周辺の村々からやってくる人の目に最初に飛び込むのは、慈善病院だったのです。イギリスのノリッチでは、かつての城壁門をくぐると大きなウエンサム川が流れ、その向こうの広大な緑の敷地の一角に、中世の聖ジャイルズ施療院が見えてきます（図7）。現在、中世の施療院がそのまま老人介護施設になっています。中世末に盛んになった七つの善行は貧民救済の主な手段で、中世社会のセーフティーネットとして機能していたのです。

### まとめ

本日は、中世末の身体と医療の文化について考えました。人類の歴史は病との戦いであると言っても過言ではありません。医療が大きく進展した現在も、新しい伝染病の脅威にさらされ、慢性の病気にもてあそばれ、治療の困難な病に苦しんでいます。寿命が延びた先進国でも、病への恐怖は依然として消えることはありません。それどころか、人々の健康意識が増す中で、病気にかからないこと、長生きすることが生きる目的にすり替わることもあります。

今日の健康観を、ペストの脅威を経験し、健康への関心が急速に高まった中世末のヨーロッパと比較すると、その

特徴がくつきりと浮かび上がります。特に中世の健康観が身体と魂の健康にあつて、その丁寧な管理を健康への道と考えたことは、現代の健康観に示唆を与えていると思います。ギリシャ医学は人間を宇宙全体の中に位置付けて、身体と魂のバランス、ハーモニーを提唱しました。この健康観がヨーロッパに伝播して、魂の健康と死後の救済を結び付けるキリスト教に吸収された結果、病気の人の身体と魂全体をケアする、ホリスティックな医療につながりました。健康の前提となるのは、告解と悔悛による魂の清めです。またキリスト教は、ギリシャ医学の体液説に基づく健康管理を背景に、ほうじゆう放縦生活を罪に結び付け、節制を促しました。特別な医療技術は要りません。生活に密着した養生指南は、中世を通して予防、健康管理の基本となりました。

このような医療は現代医療の諸問題を映し出す鏡ともなります。例えば、中世では、告解による病者の語りや問診が優先され、病者と彼らに接する司祭との間に信頼関係が築かれました。病人と時間をかけて話をせず、顔色も観察せず、病人の体に直接触れることなく、血液検査、CT、MRI、DNAなど、データだけで診断が行われることもある現代医療と大きな隔たりがあると思います。

さらに、宗教を通して解決を与えることによつて心のケ

アができるという意味で、医療と宗教の共生的な関係が社会システムとして機能していました。病は、神が人間の肉体に刻むメッセージであるという理解があり、病と治療が新たな自己成型につながる場合もあります。最も大切だと思ふのは、死んでいく同胞の魂の旅立ちを見守るといふ、看取りのシステムがキリスト教を軸に機能していたことです。このことは、現代の臨床宗教家の議論に示唆を与えます。

西洋中世の医学・医療は、今日の社会に対して決して寡黙ではありません。身体と魂とのあいだに区別のないケアが行われていた医学は人間学的テーマの実践の場であり、そこで機能していた医学と宗教の共生は生死に関する共通感性に導かれ、人間の本性的な考察と共に問われるべきものではないかと考えます。今日は中世の話でしたが、現代に通じるものを何か問うただけであればありがたいと思います。

### 質疑応答

質問——旧約聖書に、例えば爪が三つに割れているものなど、食べてはいけななものが載っていますが、それと先生

が言われた肝臓での第二の消化は関係があるのでしょうか。二つ目に、占星術の関係で、すぐ治療をせずに、太陽がその星座に入ってくるのを待っていたのでしょうか。三つ目に、血の穢れはいつごろからいわれていたのでしょうか。

久木田——ユダヤ教は食べてはいけない食べ物に関して非常に厳しいのですが、西洋中世のキリスト教はユダヤ教と対立していたので、ユダヤ教徒は独自のルールを守っていたと思います。キリスト教徒はほとんどギリシヤ由来の体液説、そして、バグダッドで勉強したキリスト教徒のイブ・ブトラーンが作った「健康表」を養生の基本としていました。例えば、水にすむ魚などは粘液質で水っぽいので、乾燥させてから戻して食べました。そういう特徴はありましたが、特に何を食べては駄目だということではなく、体液バランスを保ち、深酒しなければよかったですのではないかと思います。

占星術については、回転式の表で合わせて、このときが良いと分かれば、緊急を要さない限り待ったと理解しています。

血の穢れというのは、大昔からあります。旧約聖書は血の穢れに対しても厳しいです。でも、中世では肝炎などの知見がありませんでしたから、医師たちは瀉血したり、

血の検査をするといって採血した血を触ったり、舐めたりしました。今考えると恐ろしいです。

質問——絵の中で、看護婦さんが男性を看護しているとき、スプーンを人差し指と中指、小指と薬指で挟むようにして、ものすごく持ちづらい持ち方をしているように見えました。それがなぜか分かったら教えてください。普通に考えたら、わざわざそんな持ちづらい持ち方をする必要はないと思うのですが。

久木田——素晴らしいご指摘だと思います。私は全く気付きませんでした。飲ませるのに、こうした方が飲ませやすいということではないでしょうか。難しいところですね。フランドルの画家は、たくさんのお聖母子を描きました。その中に、マリアがキリストにスプーンでミルクスープを飲ませている図像があります。ジェラルド・ダビッドが描いたものが特にかわいいのですが、そのスプーンに似ていると思いつながら見ていたので、そこは気付きませんでした。この写本の研究者と話す機会があったら、この不思議な持ち方について検証いたします。

質問——古代では女性が蔑視されていたという事に驚きました。医療などでも男性優位で、女性は遅れていると見られていたのが、男女平等になってきたのはいつごろから

でしょうか。

久木田——基本的に女性蔑視でしたが、中世には頑張って働く女性がたくさんいました。でも、女性蔑視の思想はずっと続いていきます。最近まであったのではないのでしょうか。フェミニズムが台頭し、女性史研究が盛んになって随分変わりましたが、現在でもあるという指摘もあります。フェルナン・ブローデルではないですが、政府が男女共同参画大臣などをつくっても、そんなに簡単に変わるものではないと思います。今日は私のゼミの学生たちも来ていますが、彼女たちに、将来様々な活躍の場があるのだから頑張るようにと勉強させています。

私たちはギリシャ以来の女性蔑視の愚かさ到现在ようやく気付いたわけです。ヒラリー・クリントンも言っています、若い人たちが目に見えないシーリングを超えられないという気の毒な状態から解放されることを願っています。文化は海の底を流れる潮流のようなものですが、この機会に皆さまには、若い女性たちの活躍を応援していただきたいと思います。

## 参考文献

- 久木田直江『医療と身体の図像学—宗教とジェンダーで読み解く西洋中世医学の文化史』知泉書館、二〇一四
- 湯之上隆・久木田直江（編）『くすりの小箱—薬と医療の文化史』南山堂、二〇一一